
恋姫無双～最凶の親子～

バルバトスに対し多大なトラウマを持つ人（改）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫無双～最凶の親子～

【NNコード】

N1790Z

【作者名】

バルバトスに対し多大なトラウマを持つ人（改）

【あらすじ】

皆は知っているだろうか。若本さんの代表的なキャラであり、理不尽な攻撃とダメージを与える最悪なキャラクター「バルバトス」を。この小説は、その「バルバトス（？P仕様）」の力を得た男と「バルバトス」の親子が繰り広げる、理不尽な無双劇である。「ぶうるああああ！息子は誰にもやらあああん！」「少し落ち着くのじやああああ！」／＼／＼／＼この小説に登場する「バルバトス」はご本人となんら変わりありませんが、ご本人ではありません。そして親バカバルバトスとなっているので、「そんなバルバトスは

認めに」イー」とこつ方はどうかブラウザバックを。そしてコレは、
「真・恋姫無双～最強（凶？）の武芸者～」の改訂版でもあります
露骨な宣伝にやらい

プロローグ

「マジかませんでしたあああー。」

気がつくと、360。真っ白な空間において、見事な土下座をしていの金髪の女性が目の前にいた。

「…………えへと、どうこいつ状況？そしてなぜ土下座？すぐえ見事だけど」

「あ、土下座は慣れてるんです」

「どういづ人生送ってるんですか？あなたは」

本当に氣になる。氣になるとこえば

「やつこえば、じこはどうですか？俺さつきまでアイシング一緒に宴會してたと思つんですけど」

「あ～、じこはですね～」

金髪の女性は、かなり言こ難そつて口をモゴモゴと動かしている。時間にして数秒程経つだらうか。女性は何かを決意した表情で俺を見ると、口を開いた。

「一言で言えば、《あの世》です

「…………ですよね～」

なんとこうかかんといづか、予想通りすぎる答えだつた。といづか、こんな状況に自分が陥ることになるとは予想外だ。できればアソシアを陥らせてほしかつたね。うん。

「意外と冷静ですね？怒り狂うと思つたんですけど」

「いや、アイツらと付き合つなら沸点はかなり高くしつかないと
けなかつたので」

「ああ、あなたの友人のことですね。彼らのことは、ここでも有名
ですよ。毎年毎年、「コイツらどうするよ？」会議やつてましたも
ん」

「アイツらの存在はそこまで問題なのか……」

たしかに無茶苦茶な連中たが……。神様？達の間でも無茶
苦茶な連中として認知されてるのか。

「で、俺はこれからどうなるんですか？」

「とりあえず、転生ですね。無論チートで」

「そこまでチートなのはいりませんけどね。まあ、わかりました」
「あ、それではチートはこの紙に書いてある中から選んでください。
それと転生先も」

そう言つて金髪の女性は、一枚の紙と羽ペン（初めて实物見た・
・・・）を渡してきた。

「え」と、転生先。1、武将が全員女になつてゐる三国志。2、女
しか使えない兵器を扱う学園に転入。3、真剣で女が強すぎる世界。
4、運命。5、そげぶ。・・・・・隠してないですよね？」「レ。
そしてなんですか、「そげぶ」て」

「うん、ゴメン。その紙書いた上司の趣味」

「大変な上司ですね？」

「ううん。君に比べたらまだまだよ」

たしかに、アイツら以上に大変な人間がいるなら会つてみたいと
思う。ただし、そこまで深く関わりたくないが。というか、アイツ

ら以上の奴らと一緒にいたら、多分俺の精神がもたない。
とにかく、気を取り直して紙を見る。

「そこまで個性が強くない人達と一緒にいたいので、1ですね」

来世くらいは静かに暮らしたいと考え、1を選択した。理由？そのまま田舎とかで静かに暮らせるかもしないからだ。それ以上の理由はないね。

「さて、能力はなにがあるんでしょうかね。1、バルバトス（？P仕様）。2、鬼巫女（？P仕様）。はて、気のせいでしょうか？なぜか両方とも？P仕様なんですが？」といふか、どちらを選んでも変わらない気が

「すいません。上司の趣味です」

どうやら、来世も静かに暮らせないらしい……。

「もう、1で。比較的こっちの方がいいので」

「ですね。あ、容姿などはコチラが設定するので、なにかご要望は

「平凡な容姿で」

「…………即答ですか」

ちなみに、答えるまでのタイムは凡そコンマ7秒だつたらしい。

「それでは、この門を潜ればその世界へ行けます」

金髪の女性が指を鳴らすと、かなり大仰な造りの門が現れた。ギィイイ・・・・・・と、雰囲気のある音をたてながら門は開いていき、中には虹の渦のようなものが渦巻いている。なんというか、ドラエの旅の門みたいな感じだ。

「平凡に暮らせますように・・・・・・」

やうひぶやあ、一氣に門の中へ飛び込んだ。

転生完了。だけど父親がこの人って…？（前書き）

不定期な更新になると思いますが、よろしくお願いします！

? 「今更遅い！」

「めんなさい！お願いですから「ジエノ・サイド・ブレイバー」だけは勘弁を！

転生完了。だけど父親がこの人って…?

田を見ますと 真っ先に見えたのは、あの有名なバルバトス様でした。

「ば・・・・・・・ばぶ? (ビ・・・・・・・ビゅー)」

「おお、起きたかあ」

生の若本ボイスに若干テンションが上がるが、今はそういう場合ではない。そしてなぜ俺は赤ん坊になっている?まさか俺、食べられる…?

「ねぎやああああああああ!?(食われるううううううー?)」

「まつたく、そう泣くな。取つて食つといつわけでは無い」

「ば、ばばばば?(そ、そつなんですか?)」

「一気に泣き止んだなあ」

バルバトスさんは、少し呆れた声で言つ。

さて、身の安全は確保されたわけだが、今の俺の状況がよくわからぬ。まさか、俺はマジでバルバトスさんの息子として産まれたのだろうか?

「ばぶ? (そこなんといじりなんですか?バルバトスさん)」

通じないと思うが、なんとなく聞いてみる。すると

(いや、通じないですか?ば)

「ばぶー? (誰ー?)」

頭の中に、誰かの声が響いてきた。

(私は。あなたを転生させた)

「あぶば（ああ、あの金髪さん）」

(いや、私名前あるんですけど……。私はセラスです)

金髪さん セラスさんは、少し呆れながら自分の名前を言つ。今思えば、あの場所で血口紹介をしてこなかつたと思うのですが、そこはとじうなんですかね？

(特に問題はないと思こます)

「あぶー（心を読まないで～）」

(それと、心の中で念じれば通じますよ)

「（ううへ～）」

(せうです。それと、今のあなたの状況ですがまあ、今から情報を送るのでそれで理解してください)

セラスさんが言つと同時に、頭が少しチクリと痛んだ。

情報によると、俺は転生した先の両親が早死にしてしまい、その両親の親戚であるバルバトスさん（真名が本当にそういうこと）に引き取られた、ということらしい。

「（で、一つ気になつたんですけど、今の俺の容姿って）」

(すいません。またも私の上司の趣味によつて)

「（ああ、バルバトスさんにされた？）」

(「バカテス」の秀吉にされてしましました)

「（なんだぞ！？）」

予想の斜め上をいく返答だった。まさかと思つが、セラスさんの上司つてショタコンですか？

(なんでも理由が、「その方が面白くね?」だそうです)

「（その上司に伝えてください。「あなたはいつか殴る」と）」「（安心してください。もう既に私が殴つておきました）

「（ありがとうございます）」

（いえいえ。普段のことも含めて殴つておいたので、いつもとして
はラッキーです）

そう言つセイラスさんの聲音は、かなり嬉しそうだった。どれだけ
ストレスがたまってるんでしょうかね？まあ、それは置いとくとして

「（あれ？ そういえば……。赤ん坊からスタートと云ひ

とは）」

（すいません。一応記憶などは消わせていただくので、我慢してく
ださい）

「おぎやあああー？（マジかあああー？）」

「うん？ まつたく、よく泣く子じもだあ。まあ、それでこそ俺の息
子だがなあ」

恐りしく、前世を含めても本当に久しぶりの絶叫だったに違いない。
ところが、やうだらう。そしてバルバースさん。あなたは見た目よ
り良い人だ。

（まあ、食つちや寝してればすぐですよ）

「（やうなることを祈ります）」

そこで、セイラスさんの声は聞こえなくなつた。同時に、かなりの
眠気が俺を襲つ。

「ふああ～（ねみい～）」

「ふう。よく寝ておけえ。」寝る子は育つ「かわいい

「あ、ぶ～（お休み、父さん）」

そう言つて、俺は目を開じた。新しい世界を楽しもつと考へなが
り・・・・・

転生完了。だけど父親がこの人って！？（後書き）

次は恐らく、設定を更新しようかと思います。

設定 最凶親子について（前書き）

感想などをお待ちしております。というか、それが作者の原動力です。

設定 最凶親子について

紅鬼

真名 秀吉

性別 男、ではなく秀吉！「おい作者！」

「バカテス」で有名な、第三の性別「秀吉」をもつ秀吉と完全に同じ容姿となってしまった男。

「バルバトス（？P仕様）」の力を得て転生し、ぶっちゃけアーマーが剥がれず、攻撃がほぼノーモーション。

カウンターは一応使えるが、時々仲間にまで被害が及んでしまうため、理性でないように頑張っている。拳でも十分強いため、武器を使う機会が少ない。というか、使つたら被害が尋常ではない。

主要武器は、いわずと知れた「バルバトス」の相棒、《ディアボリック・ファング》。

自身の容姿のことも考え、最近はジジイ口調を意識しているのだが、ツッコミを入れる時などは素に戻る時がある。以下の悩みは、父親の親バカ化。

紅乱

真名 バルバトス

性別 男、ではなく漢！「わかつてゐじやないかあ。作者あ！」

いわすとした、「バルバース」ご本人のそつくりさん。というか、性能もそのまま引き継いでいるという、もはやご本人。

あまりにも強すぎるため、戦場で会う人間の半分以上は逃げる。

世間では「戦場で会ってはいけない漢」と呼ばれており、「無双漢」という二つの名をもつ。

秀吉を実の息子のように思つており、大切に思つている。

主要武器は、普通の戦斧かと思ひきや、両手専用なのに片手で扱つている。

最近、秀吉に対して求婚してくる輩が多く、その度に「ふうるあああああ！俺以上に強い奴でないと結婚は認めえええん！」という叫び声とともに「ジエノサイド・ブレイバー」を放つている。

これは戦闘ですか？いいえ、一方的なバル様無双です（前書き）

いつもおひ、ぶれない駄文です。

そしてやはり情景描写は苦手、といふか殆ど書けない。

「これは戦闘ですか？いいえ、一方的なバル様無双です

転生してから、早いものでもう六年が過ぎた。セラスさんの言ったとおり、たしかに赤ん坊のこの記憶は殆どない。だがしかし、なぜか時々思い出してしまい、頭を抱えることは少くない。

「どうしたあ、秀吉。ボーッとして」

「ん？いや、考え方をしていただけじゃ。父上」

「そうかあ」

そういえば、なぜか俺の真名は秀吉となつた。なぜこの真名になったのか、理由を聞いてみると

「やつは付けないと、お告げのよつなものがあつたからだ」

らしい。といふが、そのお告げをした人つてセラスさんの上司じゃないだろうな？

まあ、それに影響されて最近はジジイ口調を意識して話すよつこ心がけているのだが、なんとまあ難しこことだらうね、ジジイ口調。原作で秀吉がよくあそこまで話せると思つよ。

「よおし、着いたぞお」

「お、こりが盗賊どもの住処かの？」

そして今、わし達がどこにいて何をしようとしているのかと言つとこないだ泊まつた村の村長から、近隣を荒らしまわつてゐる盗賊達を討伐してほしいといつ依頼が来たため、その村の近くにある森の中を突き進み、そこにある山へらしきところに着いた。

「まつたく、面倒だなあ。これから弱い奴らは……」

「いや、父上がそれいつと色々と終わるのじゃが？」

ビシッと掌でツツ 「!!」 とされる。まあ、わしも人のこと言えた義理ではないがの？

とりあえず、どうせいつて侵入するかを考えよつとしたのだが

「しゃべりやへひわあああああー。」

とこう父上の声とともに、門があつた所からチュードーンーとこう爆発音が聞こえてきた。・・・・・つて、はい？

「父上ええええ！？何せつとるのじゅああああー。」

「考えるよりも行動だあ。よおへ見ておけえ、秀吉。これが戦いだあ」

「こやこやーー父上のま最早戦いではないぞー！？もはや躊躇じゅからなー。」

「ぶうるああああああー。」

わしのツツ 「!!」 をスルーし、父上は早速戰斧を振り上げて盜賊の住処の中へ突撃していった。

「・・・・・わし、どうすればいいじゃねつか？」

ポカーンとそれを見ていると、後ろからパキッと小枝の折れる音が聞こえてきた。

反射的に後ろを見ると、そこには

「おこおこ。こんなとこ父上玉がこむじゅねえか？」

「ふひひひひ。か、可愛いんだな」

「おいおい。お前こんな子どもがいいのかよ」

下品な笑顔を浮かべた、ノッポ、チビ、テブの三人の盗賊がいた。

「つむ。死ぬがよい」

笑顔で言つと、ちようど背丈が同じくらいのチビに近寄り、ドゴン！と拳骨を頭上に落とす。すると、そのチビは脚から地面に埋まつてしまい、ちよつと生首のようになってしまった。

「え？」

「え？」

「なにこれ怖い」

「じゃ、さよならじゃ」

「はい？」

呆けている一人に対し笑顔で言つと、拳を固める。

「これが漢の・・・・・・振り上げじゃあああ！」

「アポロオオオオ！？」

『漢の振り上げ（ｖｅｒアッパーカット）』を放つと、一人は星となつた。キラーン。

「さて、わしも行くかの」

三人のことは記憶から抹消し、わしも盜賊の住処へと入つていつた。

「あー・・・・・まあ、予想通りじゃの」

あちこちから断末魔のようなものが聞こえてきているが、もういつものことなので慣れた。というか、もう人死ににも慣れた。
なぜなら、赤ん坊のころから人の死体を見るのはショッちゅうだつたからだ。

なんでも、父上はかなり有名な武人らしく、その父上を倒し名を上げようとする者も少なくなかつたため、四六時中挑戦者が絶えることがなかつたためだ。

「しかし、この広さではどこに村の娘達がいるのか

村長に頼まれたもう一つの依頼、それは攫われた村の娘達を取り返してほしいというものだつた。まあ、盗賊どもの殲滅は父上に任せるとして、わしは娘達を探すかの。

ということで、盗賊の生き残りを求めてそちらへんを彷徨い歩くことにした。したのだが　なんといつかまあ、生き残りは絶対にいないであろう惨状が見えるばかりだつた。

「うん?」

ふと、辺にからか誰かがすすり泣く声が聞こえてきた。よく耳をすませてみると、その声はけよしが通り過ぎようとしていた穴の中からじやつた。

「ふむ。辺にか

念のため警戒しながら穴へ入つていいくと　そこには複数の女

性がいた。

衣服こそボロボロなのだが、乱暴された形跡は一切ない。

「おおい。助けに来たぞい」

わしがそう声をかけると、泣いていた女性達はポカンとした表情^{かお}でわしを見てきた。

まあ、気持ちがわからんでもないが、さすがに予想通りすぐこのアクションなので、苦笑してしまつ。

「や、とつとつこいつからでるや。でないと、父上がこいつを灰燼にしてしまいかねないからの」

「あの、父上つて・・・・・・」

「ああ。「無双漢」と言えればわかるかの?」

「「無双漢」つて、あの?」

「やつじや

父上のことを言つと、質問をしてきた赤毛の女性以下、全員が顔を青ざめたりしてゐる。まあ、無理もないがの。

「や、とつとつ出るや」

『はこー.』

全員、息の合つた返事をしてきた。やはり、まだ死にたくないようだ。

そして、皆を連れてこいつから出よつとした時だった。

「おひあー.」

生き残りであらう盗賊の一人が、わしに襲い掛かつてくる。

しかし、慌てる」となくわしは

「む？」

一本の指で白刃取りをする。そして、そのまま盗賊へと拳骨を落とす。

「あべしー。」

なぜか、世紀末の断末魔を言いながら盗賊は地面に埋まる。

「さ、行くぞい」

『S-i-r! Yes - S-i-r!』

・・・・・なぜ軍隊式の返事をしてきたのだろうか。そしてなぜ英語を使える。おい、そこの赤毛さん。なんで顔を青ざめてるんだ。

かなりの疑問を抱えながらも、わしは女性達を無事に外へ脱出させた。ちなみに父上はといふ

「ぶうるあああ！」

戦斧を掲げて雄たけびのようなものを上げていた。思わず拳骨を落としたわしは絶対に悪くない。そう、絶対に。

村に戻ったわし達は、村長から依頼の報酬を受け取ると、颯爽と村から去った。

「さて、今度はどこに行くかのつ?父上」

「そうだな。「江東の虎」に会つておくれのもお、悪くはないな」

「江東の虎」。たしか、孫堅のことだつたはず。ところどは、まだ孫堅は死んでないらしい。

「では、行くかあ。「呪」へー。」

「応!」

そう返事をすると、わしは父上の後を追う。いつか、父上以上の武人となることを夢見て

「つて、わしもう既に父上越えてるのではないか?」

色々とぶち壊しなことをつぶやいてしまつわしじやつた。

これは戦闘ですか？いいえ、一方的なバル様無双です（後書き）

感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1790z/>

恋姫無双～最凶の親子～

2011年12月7日22時49分発行